２０２２年１０月の総評に代えて
○林　桂○

●郡司和斗●（茨城県24歳）

手を浸して
あたたかいプール
金木犀のいま降るところ

【評】「あたたかい」とは言え、金木犀の花が散る秋の季節である。人気の消えた学校のプールのような場所が思い浮かぶ。暖かい午後か。小さな花の金木犀は「降る」というのに相応しい。プールにも風が運んできているか。しみじみとした寂寥感。

●まちりこ●（埼玉県47歳）

冬服は夏服よりも
正しくて
灯油の匂いのする美術室

【評】制服の夏服は略装扱いである。冬服が「正」装なのだ。一般教室よりも広い美術室は授業以外は人気もなくて冷え冷えとしている。冬、そこで石油ストーブが焚かれると匂い立つ。忘れていた空間が甦ってくる。

●立花ばとん●（東京都21歳）

夜の外側に雪虫がいる
夜の外側に鏡の色がある

【評】対句表現が美しい。「雪虫」に対する「鏡」。「いる」と「ある」まで対比表現になることを知った。最後の「鏡の色がある」に映像が収斂する。その意外性の美しさ。

●松下誠一●（東京都19歳）

醤油かけごはんで空腹を逃れる
火を禁じられていた少年期

【評】両親（たぶん）が遅くまで働いていて、帰りが遅い家庭に育つ少年。子どもが一人で火を使うと危険なので、親の不在時には禁じられている。その言いつけを守りながら、独りで空腹を満たす夕食をとる。健気な生きる力の回想。

●豊冨瑞歩●（茨城県20歳）

天井で
腕時計から反射したひかりが
必死に泳ぐ学校

【評】退屈な授業を、腕時計の反射光を天井に遊ばせてやり過ごしている。恐らく、先生も生徒も気づいていないだろう。しかし、光は思いを乗せて「必死に泳ぐ」のだ。

●氷丸●（茨城県 19 歳）

自販機の灯りに腰をおろす帰郷

【評】若い人の帰省。あるいは故郷を出て間もない帰省。万感の望郷の思いはない。乾いた感情が、自販機の灯りにしばし休む姿に投影されている。

●中矢温●（東京都 23 歳）

引越の荷解き新しい町の花屋

【評】新しい生活が始まる期待感が「新しい町の花屋」に投影されて見えている。

●　杢いう子●（佐賀県 38 歳）

水こぼしやすくて老いる秋日和

【評】老いるとは、日常のちょっとした所作に狂いが生まれるところから感得

する。ここでは「水こぼしやすく」で実感されている。

●田崎森太●（東京都71歳）

掌の熱を移して捨てるため木の実

【評】無意識に団栗を拾ってしばらく手にする。子どもならば、次の遊びの道具として思いを馳せるところだが、大人となってはそんな目的はない。しばらくして捨てることになる。しかし、団栗が温むまで手にしている間の思いは、回想のなかにあったに違いない。

●吉沢美香●（宮城県23歳）

血液が耳まで届く冬の虹

【評】冬の冷たさに、一番に冷えるのは耳たぶだろう。しかし、それでもほの温かい。「冬の虹」との取り合わせに、若々しい身体を感じさせる。

●こはくいろ●（大阪府17歳）

きみの言葉は鳴るのだから、
いい加減に弾いていないで

【評】「きみ」は特別な存在で、その一言一言が心に響くのだ。「きみの言葉は鳴るのだから」はいいなあ。ちゃんと向き合った言葉で語ってくれなければ困りますよ。そう言っている。

●にゃー●（群馬県43歳）

でしょう。
語尾が優しい
父でした。

【評】お父さんは既に亡くなっているのだろう。子どもに話しかけるときに「でしょう」。その言葉が耳に残る。「優しい」という実感は、このような具体的な細部に宿る。

●Flim●（東京都22歳）

ローマまで歩きたいなら
１０６日かかる
グーグルマップによると

【評】グーグルマップには、徒歩で、車で、電車で、何分かかるかの表示がある。私たちは、実際に行動する範囲で使うので、遠くローマまでのために使うことはない。１０６日は日常を越えた数字だが、それを表示するマップに

しばし浸る。不可能な１０６日が、思いの中で、少し可能なようにも思えてくる。

●玻璃●（愛媛県22歳）

水にさえ致死量があり枯れ野原

【評】水は命の源だが、それでも大量摂取は水中毒を起こし死に至ることがあるという。ネット検索では6　㍑とするものがあった。対照的な水涸れの「枯れ野原」との取り合わせ。

●真島しましま●（千葉県18歳）

銃撃戦が繰り広げられ
味噌汁があったまる

【評】根柢にウクライナ戦線への批評があるだろう。しかし、「味噌汁があったまる」は、日本での事象に違いない。これは、新興俳句の戦争詠「熱い味噌汁すすりあなたいない」（　波止影夫）を踏まえたものだろう。作者は１８歳。恐るべし。

●日下部友奏●（群馬県17歳）

朝四時の寝なくていいや秋の海

【評】朝の四時まで起きていることがあったのだ。いけない、少しでも寝なければと判断するか、もう寝るのをやめようと判断するか、分かれるところ。しかし「秋の海」にいるのであれば、自ずから後者になるだろう。

●和泉次郎●（新潟県47歳）

いるようで
いないようなら
しろたえの
マスク取っちゃう
秋の霊園

【評】秋の彼岸のお墓参り。あたりに人気はない。そのような場面では、最近はマスクをしいないことが推奨されている。しかし、「いるようでいないようなら」には、不確かな、ご先祖様その他霊界の人々が意識されているように思える。マスクに「しろたえの」の枕詞を付けたのも、マスクの存在感を強く意識させる。愉快な作品。